

PHD LETTER

71

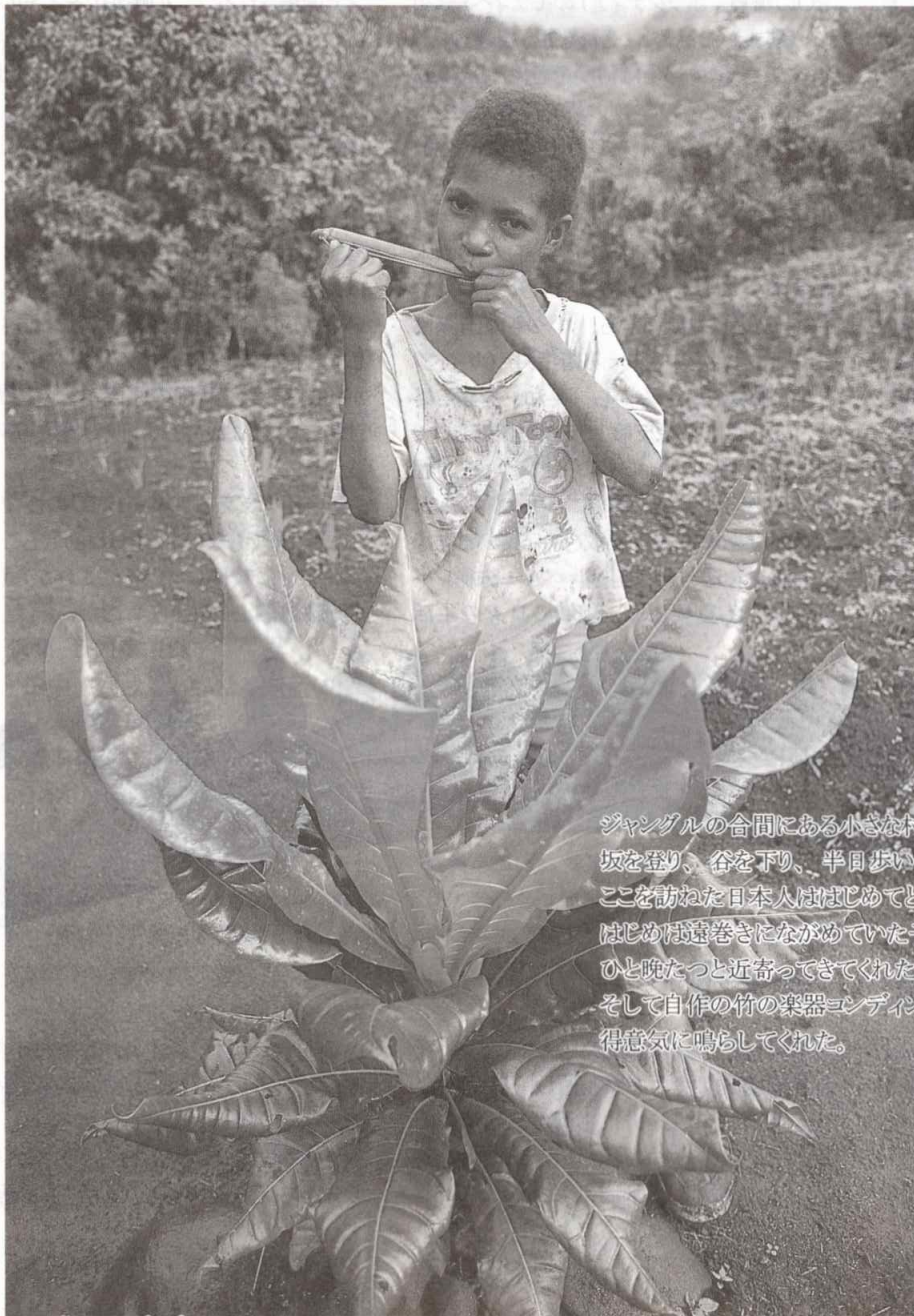
PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1999・6

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

- 彼らと手を取り合っていくには?
～旅から戻って考える～…………… 3P
- 『こんなところからやってきました』…………… 4P
- 今年の研修生とソディは親密な関係!!…………… 6P

発行： 財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人： 藤野 達也
住所： 〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
定価： 100円



ジャングルの合間にある小さな村、ブナガン。
坂を登り、谷を下り、半日歩いて、やっとたどりついた。
ここを訪ねた日本人ははじめてとか。
はじめは遠巻きにながめていた子供たちも
ひと晩たつと近寄ってきてくれた。
そして自作の竹の楽器コンディンをピョン、ピョンと
得意気に鳴らしてくれた。

バブア・ニューギニア モロベ州 撮影：FUJINO.T

東西南北 問題解決 取組日記

3月×日

4月来日を予定していたパプア・ニューギニアのアキガオさんが、家庭の事情で日本に行けないとの連絡が入る。今期は予備の人を用意していなかったため、代わる人を選びにタイへ。まず東北、カラシン県にワラヤさん(88年) サウェーさん(91年)を訪ね2000年度研修生について相談。それから、以前から希望の出ていた北部山岳地帯カレンの村、ムシキーにてかける。ここは85年にプリチャーさんを招き、また草木染・手織り布を通じて村の女性とおつきあいを続けているところだ。その布のグループの活動をより活発にするための加工の技術やアイデアに加えて保健衛生を学ぶことを目的に、グループの中心メンバーであるベリポーさんを選んだ。この選考の場にはグループの女性が30人ほど集まり、2時間近く研修の内容について話し合った。こちらからの押しつけでなく、村の人々の意見が研修に反映するには大切な時間だ。研修生の帰国後の村での活動には、共に動いてくれる仲間の存在が大切になるが、ここはすでにグループがあるので心強い。山の村からチェンマイに戻り、この地域全体のカウンターパートであるタイ・カレン・バプテスト会議の総主事サニー氏に結果を伝え、フォローをお願いして、帰国。

4月0日

昨年夏にイギリスからローレンス・テイラー先生を招き「開発」についてのワークショップ、講演会を行い、好評をいただいた。同種の催しを今年は秋にしようとするためにインドにてかける。私が93年に指導を受けたポール・シロモニ先生と打ち合わせるためだ。先生は、人材開発、組織開発を専門とする経験豊富な方だ。より良い社会を作っていくために働く人(例えばNGO、NPOの職員、ボランティア)のモチベーション(動機)を高め、それを担う組織のあり方やチームワークとは何かを考え、その働きを高めるための学びの場を用意したい。(日程はニュース欄)

4月0日

アユス=仏教国際協力ネットワーク(本部東京)の春合宿が神戸であり、パネリストの一人として参加する。いつもの国際協力の話ではなく、日米防衛指針(ガイドライン)関連法がらみから「平和」を語る場だ。PHD協会は反戦・反核を正面きって訴える活動をしているものではないが、団体名にあるように最終的に平和な暮らしが実現するための人材育成をやっている立場から意見を述べた。国家レベル・法律レベルの平和も重要だし、地域の日々の生活

から積み上げていく平和も大切だ。

PHDのPには、提唱者岩村ドクターの広島での被爆体験があることを改めて思い出していただければと思う。

5月0日

貧しい国々の経済において、債務(ひらたくいえば国の借金)の問題は大きな存在である。その内のアフリカを中心とする「重債務最貧国」(1人当GNPが785\$以下で債務総額がGNPの80%以上か輸出額の220%以上の国)の債務の帳消しを議題のひとつとするサミットが6月中旬ドイツのケルンで開催される。この帳消しをイギリスで起こった「ジュピリー2000」という民間のキャンペーンが推進してきた。これには世界のNGO、労働組合、宗教界も加わり、日本でも昨年からの民間団体が名を連ね、政府への申し入れや世論喚起を行っている。重債務国の債権総額の3分の1を占め、額も1兆円以上となる日本政府の対応は鈍かったが、世界の流れには抗しきれずいくつかの条件付で免除する方針を打ち出してきている。経済、政治がらみの話はわかりにくい、貧困の原因がその地域にだけあるのではないことを理解できる事例である。

研修生を支える事業がPHDの柱であることは言うまでもないが、PHD協会もこのキャンペーンに賛同している。これからも社会の動きに関心を払っていききたい。

総主事代行 藤野 達也



中央のTシャツ姿がベリポーさん

会費をよろしくお願ひします

この6月でPHDの活動は19年目を迎えます。1998年度は、会費収入で設立以来初の1,000万円台を達成することができました。社会・経済の状況が悪い中、皆様がお寄せくださった暖かいご理解とご支援の心から感謝申し上げます。

この18年の間に私たちの住む社会は経済的・物質的には発展を遂げましたが、食糧・環境・健康・人権など人間の生存に関する問題はいよいよ深刻になってきています。便利さや物質の豊かさを求め続けた結果、人間本来の生き方に大きな問題が起きているのではないのでしょうか。

アジア・南太平洋地域から日本にやっ

てくる研修生の村の様子はどうでしょう。既に物質優先の考え方が浸透し、環境や健康、村の人の生き方に影響が出始めているところ、近いうちに影響が出ると思われるところ、まだまだ従来通りの生活をしているところと状況は様々です。しかし、人間が便利さ、豊かさを求めていくことは世界共通の流れのようです。

PHD活動の提唱者である岩村昇医師は、「余りにも便利な生活、有り余る物質に囲まれた生活、自分だけのことを考える生活、これでは日本はダメになります。人は独りでは生きていけない、お互いに分かち合って生きる他に道はない」と早くから警

鐘を鳴らしています。

研修生たちは、自分たちの村が抱える困難な状況の中で、勇気を持って村の自立・生活改善に向けてがんばろうとしている人たちです。私たちも彼らへの協力を通して分かち合いを実践していきたいと思ひます。

皆様からの会費・ご寄附が基本となってPHDの活動は支えられています。会費という活動の基礎となる部分に、継続してご支援をお願いいたく存じます。そして一人でも多くの方を仲間としてお誘いください。皆様のご協力を重ねてお願い申し上げます。

事務局長 山西 一平

彼らと手を取り合っていくには・・・?

～旅から戻って考える～

今年も、3月に16期生の研修最後のまとめとしてフィリピン比較研修旅行に出かけました。研修生とともに参加したお二人の報告から内容をまとめてみました。

比較研修の日程

- 10日 サフルディ(SAFRUDI・現地の受け入れ団体)訪問 → ガバルドンへ移動
- 11日 栄養のプログラム
- 12日 カルガンの農民グループ見学
- 13日 保健・手工芸品プログラム
- 14日 農業・洋裁・保健プログラム見学 (ガバンにて)

竹安裕美(関西NGO協議会職員)

ガバルドン地域カルガン山のふもとに住む人々は、農業で生活している。ここには、サントスという華僑が仕切る契約栽培のシステムがあった。玉ねぎの種、農薬、化学肥料をワンセットで農家に渡し、収穫時に元手分を差し引いてサントス側が決める代金を支払うというシステム。台風などの理由で収穫がかんばしくないと借金だけが残る。この地域は、12月から3月は一面玉ねぎ。

研修生の一人が「いいと思ってやっているのか」と聞くと「ジャックポット(=賭け事の当たりの意味)を待っている」という。つまり、玉ねぎの市場の価格が高いこと、たくさん収穫できることが重なる、大もうけできる時を待っているとのこと。今までの借金が全部チャラになり、テレビやトラクターが買えることもある。でも、めったにそんな時はこない。「なのになんでそれを続けるのか」と研修生が尋ねると「元手無しでは、何もできない、長い間ずっと貧しさに苦しんできているから…」との返事。すごくショックだった。

そういう弱者から吸いとるシステムに疲れきっている人たちにサフルディがやっていることは…システムから解放する、もしくはシステムに対抗できる力を与えるということ。

ワーカーが村に入って、何カ月も村の人と一緒に寝起きして生活しながら村の状況を見て、その中から問題意識のあるリーダー格の人をみつける。その人にアプローチしてその人たちの興味関心を引き出して、グループづくりをして

いく。村の問題は何かをリーダー自身が考え、問題意識をみんなを持って、それに対して何か行動に移れるようにと、側面からサポートしている。今期の研修生のエディーさんも、そのリーダー格の一人。歯の治療もできる。そうすれば、治療費はかからない。また、玉ねぎとかのシステムに対抗するものとして、有機農法を進めているのもグループの活動のひとつ。

でも、この村のワーカー、リンダさんによると、「現実には、ガバルドンの状況は



栄養のプログラムに味見で参加。

悪くなっている」とのこと。この村では、副収入のためにシーグラス(草の一種)で手工芸品を作っているが、農業の収入を上回っているらしい。搾取する側、される側の差は、ますます広がっている。お金を持っている人は、政治家を動かすことができ、そうすると国も動かすことができ、そうすると国も動かすことができる。国の政策を通していくだけでも自分に得るように動かすことができる。

システムが、がっちり彼らの生活の上を覆ってしまっているところで、彼ら

とどうしたら手を取り合っていくのだろう?というのが私の中に残った問題。

鬼木たまみ(98年度国内研修生)

今回のツアーの間、サフルディのスタッフや村のワーカーから「人々の意識を変える、高める」ことがいかに大切か、難しいかということは何度も聞いた。今までの農業の形から有機農業へ変えていくこと、子だくさんが幸せという考え方から家族計画を行い、母親の健康や家庭の経済状況を考えることなど、人々の中で「あたりまえ」と思われ、長年にわたって浸透している考え方ほど、変えていくのが困難だということは容易に想像がつく。日々の生活で精一杯の中であれば、なおさら「意識を変える、高める」などという言葉だけでは全く意味を持たないであろう。しかし、意識づけられることによって、人が集まり、変化が起き、形や動きになって見え始めたとき、とてつもないパワーが存在することの一端を私は感じる事ができ、力づけられたように思う。

村での学びから、日本の中で「変えていくこと」の難しさを気づかされた今回でもあったが、「個人の生活レベルの見直し、自分のできることから」ということは問題の次元を異にして、日本のNGOが日本国内で果たす役割や活動の意味などをこれからも問い続けつつ、活動を続けていきたい。



村の人と評価のミーティング(ガバンにて)

17期生

4月11日、12日で3人が来日し、日本語研修(6週間)のあと、現場研修が始まります。遅れてきたベリポーさんは、今日日本語研修中です。

『こんなところからやってきました』

エディー(エドアルド)さん フィリピン

研修内容:農業

毎年3月に研修生が比較研修で訪ねるヌエパエシーハ州ガバルドンは、首都のマニラから北東にバス、ジブニーを乗り継いで6時間の農村地域。エディーさんの住むマリナオはガバルドンに16ある村のひとつで、人口は1600人。オリンピアさん(93年短期)ミノさん(96年)もガバルドンの出身で、エディーさんが3人目の研修生です。

彼の推薦団体サフルディは、都市と農村の両方でそこに生活する人々の生活改善について取り組んでいます。地域での住民組織によって村づくりを進めています。

マリナオでは数人しかいませんが、ガバルドン全体では米づくりのほか玉ねぎの栽培が目立ちます。そんな中エディーさんは、米の品種を農薬・化学肥料をあまり使わずにすむものを多くし、堆肥を使うなどして自分の田畑で始めています。サフルディのコーディネーターやスタッフとして農民に働きかけてきましたが、言葉だけでなく自分がやって見せなければと、昨年からは農業専業です。

カトリックの信者で、家族は奥さんと5人の子供。近くに高齢の母や兄弟も暮らしています。

PHDの研修生としては高齢ですが、ヤル気一杯です。

ダスウィルさん

インドネシア

研修内容:農業

西スマトラ州からは、今まで漁村より男性は漁業、女性は保健衛生をテーマに10人を招いてきました。数年前から窓口となっている大学教授のシャリフ・アリさんや以前の研修生たちとの話から、更に研修の機会を必要とする地域にひろげようと調査を行い、今年初めて農村出身の研修生を迎えることになりました。

ダスウィルさんの住むソロ郡タベ村は、州都パダンから東に車で3時間以上内陸に入った山村です。州政府から貧困度ランク最下位(IDT)の指定を受けている村のひとつです。人口2400人の村で、最近電気も入っていますが、普及率は5%とまだまだ低く、トイレも20%以下の普及率です。

作っているものは、主食のお米とさとうきび、野菜などです。村の農業は昔からの伝統的な方法が中心で、新しい知識、技術は少なく、農薬や化学肥料はまだ一般的ではありません。

来る前に日本語を習ってきて、たとえば「うれしい」を「幸いです」と文語的に話し、それがウケています。

家族は、奥さんとふたりの子ども。さらに双方の両親や兄弟も合わせて12人の大所帯で生活しています。イスラム教を信じています。

ポーディさん

タイ

研修内容:保健衛生、洋裁

一昨年のアンボンさん、昨年のサワンさん、ブラチャクさんに続いてのメーボンソン県メーサリアンからの研修生。この地域初の女性です。

チェンマイから西へ250km、車で5時間のところ



ろで、サワンさんの村とは車で10分と離れていません。

ポーディさんの村メートップヌアは人口550人、その中の80人の集落に住んでいます。村人は米づくりを中心にした農業を行っています。生活のための水は天水と山から引いた水、トイレは各戸にあります。電気は96年にきました。炊事にはマキを使います。診療所、学校は2km程離れた集落にあります。昔は、病気の時にまじない師に祈ってもらうこともありましたが、今はありません。出産は病院で行う人が多くなりましたが、村に産婆さんもいます。大病の時は、メーサリアンの町の病院に行きます。

この地域にも、ブリチャーさん(85年)夫妻が働きかけて始まった布のグループがあり、彼女は今はまだ積極的なかわりではありませんが、メンバーからの期待がかかる若手です。

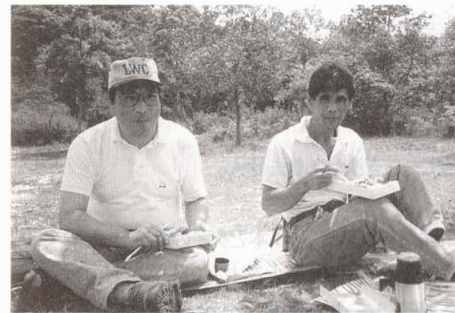
14歳の時に父親を亡くしており、母と兄弟たちの7人で暮らしています。6人兄弟の5番目です。宗教は仏教です。

~ホストファミリー紹介~

岡野 重和さん 和枝さん(エディーさん)

神戸市

息子さん、兵庫県日高町で昨年からは本格的に堆肥・野菜を作っているの、休みの日にはエディーさんも出かけ、畑を手伝っています。「畑に行くと、生き生きしているし、エディーさんがきてから畑がきれいになった」とお父さん。「家では、食事の後片付けなども



エディーさんと(5月のハイキングにて)

手伝ってくれるので助かります」とお母さん。日曜日には、近くにあるカトリック教会に行っています。

伊藤 明彦さん 克美さん(ダスウィルさん)

明石市

「これまで1週間くらいでホームステイを引き受けたことはあるけれど、こんなに長くは初め

て」とおっしゃるお母さん。今、ダスウィルさんの日本語のテキストを使ってインドネシア語を勉強中です。



ダスウィルさんと

お宅の向かいには畑があり、また家でも、蜂や鶏、ウサギなどを飼っていらっしゃるの、休日にはダスウィルさんもお父さんと一緒に作業をします。

浜口 稔さん 泰子さん(ポーディさん)

神戸市

稔さんが、神戸市シルバーカレッジでPHDの話聞いたことと息子さんがタイで働いていることがきっかけで、今回ポーディさんを引き受けてくださることになりました。

5月にポーディさんが1泊2日で出かけたときにも「ポーディがいなくてさみしいなあ」と言うほど娘のように可愛がってもらっています。休日には、お母さんと一緒に散歩や買い物に出かけたり、タイ料理を作ったりしています。



ポーディさんと

「ゆっくりとやっていきましょう」~フィリピンC.O.ツアー~

神戸で最後の交流会を終えたあと、ホッとしたのか、一時熱を出してしまったゲオリさん、ブラチャクさんと2人の研修生に日本人を加えた7人で、3月9日から1週間余り、ルソン島にあるガバルドンを訪ねました。

「もう一度会えたら、次は日本語で話せるのにね」——私とサワンさんが泊まっていた家のお父さんの言葉です。実はこの人が、今期研修生のエディーさん。私が英語で通訳しましたが、サワンさんが、村の人口は、電気は、エイズは、民主主義はありますかという日本語で質問することへの最後の返事。

日本を出発する直前『村づくりのためにふさわしい人はどんな人か』をみんなで話し合いました。研修のまとめの部分では前半に重きをおいた技術よりも、村を良くしていくための人とは、どんな方法があるのかなどを考えます。それをより深めるためのフィリピン滞在です。

PHDのフィリピンのカウンターパート、サフルディというNGOが活動を展開している地域のひとつにガバルドンがあり、地域組織化(Community Organizing)という手法を用いて村づくりを進めています。

私たちはいくつかの村を訪ね、母親の栄養教室を含む保健活動、農業の現状(玉ねぎの契約栽培と農薬・化学肥料)と有機農業の取り組み、手工芸品製作を通しての

現金収入プログラムなどから学びました。

母親グループとの会の中で、ブラチャクさんが「皆さんは母乳ですか?」と質問。ワーカーから「母乳を勧められています。母子の関係を深め、栄養があり、免疫があり、お金もかからないから」との返事。これに対しサビトリさんが「母乳は安全ですか?」と尋ねました。すると「いろんなもので食物が汚染され、残念ながら母乳も汚染されてきていると思う。農薬や



玉ねぎ畑から戻ってきたミノさん(14期)にゲオリさんが農業についていろいろ質問(中央左 ゲオリさん)

添加物が使われることは誰にとっても利益なのか?」——保健の話が農業やもっと大きな世界の関係・つながり・構造にまで発展しました。

農民グループとの話し合いでは、農薬・化学肥料を過剰に使うことが身体や土壌に良くないと頭では理解しているのにやめることが出来ていないとの説明に「どうして?」とゲオリさん。種、農薬、化学肥料がセットになった契約栽培でない生産物を買って取ってもらえない

から仕方ない、との答えに半ば諦めの「じゃあみんな薬使ってどんどん玉ねぎ作つたらいい。身体が悪くなったら気づくでしょ。」最後にサワンさんが「みなさんもやめましょう」と日本語で一言。

サビトリさんの「庭で自家用だけでも野菜を作つたらどうか。ものを買うお金が少なくてすみ、別のものにお金を回せると思う。私のグループの洋裁と同じ考え方で」という言葉に村の人もいい提案だと頷いていました。

フィリピンの農地改革や土地のローンのシステム、仲買人を通じた契約栽培など、村の問題を理解するために知るべき背景、前提があります。同様に、研修生それぞれの国にはそれぞれ固有のまた特別なしくみや問題があると思います。その解決には、やはりその国を、その地域を知っている人が中心となって取り組んで

いかなければ、と改めて実感しました。その一方で、この村がつながっている大きな経済のしくみに私たち日本の生活も関係していることも、認識しなければなりません。

研修生にはゆっくりと、時間をかけて消化しつつ村づくりに取り組んでいってほしいと思います。また、日本で私たちは自分の住む社会やそこにある課題を知って、考え、変えていく——そのための行動や活動は、彼らが村づくりに取り組むのと、同じではないでしょうか。

(小松 みち)

ベリポーさん

タイ

研修内容:洋裁、保健衛生

85年にブリチャーさんを招いて以来、久しぶりのムシキヤからの研修生です。

90年から始まった草木染手織り布のグループの主要メンバーで、10周年記念事業の短期生として91年に来日したことがあります。

会報紙面で今までにもよく目にされているムシキヤという名前はカレン語の言い方で、彼



女の住むノンジェットノイ村を含む50くらいの村の総称です。ノンジェットノイ村は、チェンマイから北西に150km、車で6時間、カレンの人が多く住んでいます。人口は500人、ベリポーさんを含む多くがクリスチャンです。

既にあるグループの活動を強化できることは、時間をかけての長い付き合いがあつてこそ。

家族は、両親と6人兄弟の上から2番目。家は雑貨屋も営んでいます。

*タイでのインタビューより



今年の研修生とソディは親密な関係！！

ソディは今、二人の研修生の来日で盛り上がっています。

彼女たちは私たちソディと9年にわたり交流を続けている村からやってきているからです。ムシキーのベリポーさんは、このグループの中心メンバーであり、メーサリアンのポーディさんは、これから期待される若手です。

これまでのソディと村の交流は、スタディツアーで訪れたり、手紙のやりとりをしたりするなど間接的でしたが、このたびの来日

で織り手のメンバーとソディのメンバーが顔を合わせて直接、交流ができるのです。

彼女たちの日本語が上達したら、話したいことがたくさんあります。ソディのミーティングや活動に加わってもらい、ソディをもうひとつの段階に持っていきたいと考えています。

私たちの考えていることは、
1、毎月第3土曜日に開かれるミーティングに参加して、日本のメンバーの生の声を聞いてほしい。

また、村の活動や織り手の声を聞かせてもらって手紙のやりとりでは不十分だった点を補い合いたい

2、ソディと村人の考えの相違点を聞く

3、一貫してソディが村の人に望んでいたことを再確認したい

4、バザーに参加して消費者の生の声を聞く

き、自分たちの作品の紹介やアピールすることを通して作品への日本での評価を知ってほしい

5、日本の手工芸の製作から販売までの流通や経営のノウハウ等を見てほしい

6、染めから織りまでのワークショップを開き、日本とタイの織物の工程の違いを体験してほしい

など挙げたらきりがありません。

彼女たちが帰国後、日本とタイの橋渡しとなり、自分たちの伝統と文化に自信を持ち、自ら販売ルートを探し、それぞれの村のグループが自力で活動していけたらと願っています。

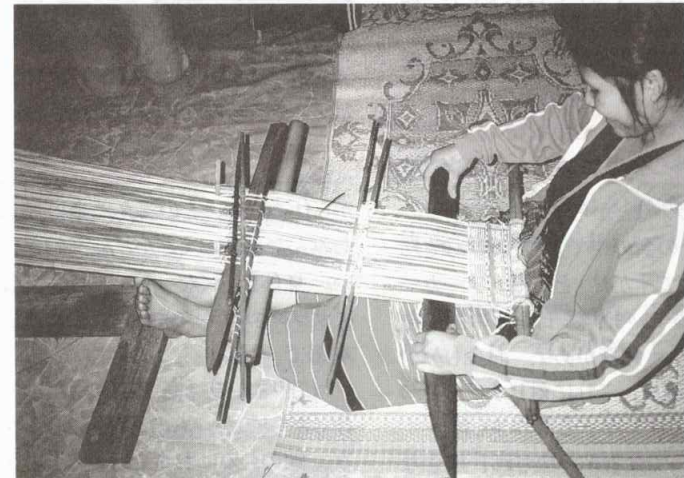
このように今年は、ソディと布のグループの女性たちの理解を深め、将来の活動につなげていくめったにないチャンスです。ソディでは二人を交えた布や染めのワークショップ等を企画していく予定です。

こんなソディと研修生に関わっていただける方はいませんか？ 研修生と話したいという方、布大好きという方、染め・織りに関心のある方、伝統手工芸の再現をしている方、ミーティングに参加できる方など幅広く多くの方々に関わっていただきたいのです。また、こんな場所、こんな人などいろいろな情報をお待ちしています。

布を通してタイの村が見えてくるソディに参加し、そこから日本について考えてみませんか？ 多くの方のご意見、ご参加をお待ちしています。

今すぐPHD協会へHURRY UP!

川本 恭代



手許で織り機が浮かび上がる。むずかしい織りはできる人が少なくなってきた。(ムシキーにて、昨年のツアーより)

■ 新作Tシャツができるまで

数年に一度、リニューアルするPHD協会のTシャツ。今回も、「どんなデザインにしようか、皆さんから公募しようか、でも、あまり時間も無いし…」などとアイデアを練るうちに、思いついたのが、96年のネパールツアー参加者、京都の白井郁美さん。彼女が描いたツアーレポートのイラストが絶品で、彼女に頼んでみようということに。

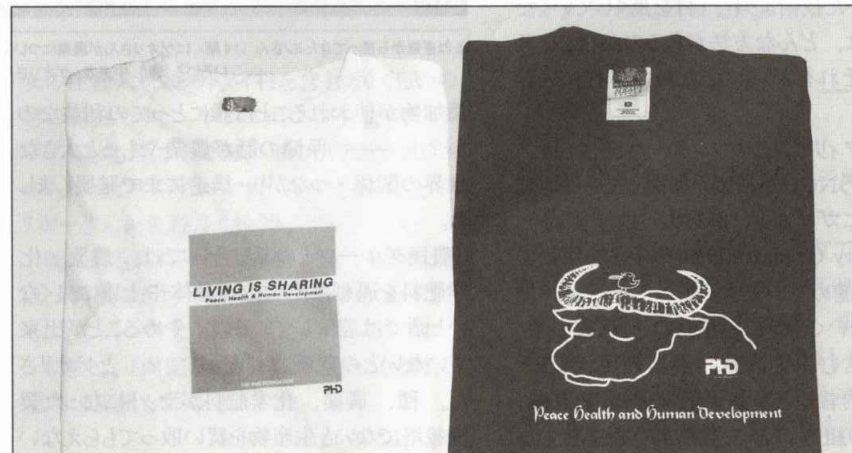
「PHDの活動、アジアの村のこと、協力、ボランティアなどがイメージできるもの」「老若男女を問わず着てもらえるもの」などの難しいリクエストに対し、何枚も描いてもらった中から決めたのが右の水牛柄。

「アジアの農村にいる生き物と言えば、水牛。バナナや象はTシャツにいかにも

ありそうなんでもなかなかお目にかからないヤツを描きたかった。鳥&水牛ペアでもちつもたれつ。アジア&PHDペアももちつもたれつって感じです」とは、白井さんの言葉。

ちなみにもう一枚は、スッカリ、シンプルなデザイン。皆さんのお好みは、どちらですか？ご購入とともに、ご意見もお待ちしております!!

*好評の唐辛子5本の柄も発売中!!



PHD NEWS

□会費・ご寄附寄託状況

1999年	2月	117件	1,895,100円
	3月	166件	3,831,272円
	4月	96件	912,262円
		379件	6,638,634円

以上の通り皆様より多くの会費とご寄附を頂戴いたしました。ご協力に厚くお礼申し上げます。

□PHD協会の理事が交代しました

5月12日開催の第44回理事会において理事の宮崎秀紀氏、山口一史氏が辞任し、代わって神田栄治氏、森本章夫氏が就任いたしました。

□インドより講師を迎えワークショップ

2頁でも紹介したように今年も海外から講師を招き、より良い社会を実現するために働く人や組織を考えるワークショップ、講演会を行います。

お招きするポール・シロモニさんは、カルカッタを拠点に社会的弱者のための社会変

○月×日のPHD協会

職員 田中 ダスウィルさんと事務所に戻る時、逆方向の電車に乗り、ダスウィルさん「?」。数日前逆方向電車に乗って遅刻のエディーさんから「わしとおなじ」の一言。

職員 谷 16期生を送り出しちょっと一服。帰国まもなくブラチャクさんから結婚の知らせ。14期ピドゥル、15期アンボンに続く、帰国即結婚コースに感慨深し。



編集後記

3月、日本での涙のお別れ、そして16期研修生達は元気にそれぞれの村に帰って行きました。研修生の帰ってしまった後のPHD協会の事務所は少しがらんと寂しい感じです。

しかし、4月12日、新しい研修生の3人が来日し、一気に事務所は賑やかになりました。私が仕事を終えてPHD協会に行く

革の様々なプロジェクトにかかわり、それを担う人材・組織トレーニングにあたっている方です。

滞在は9月23日から30日の間、主に神戸周辺で。開催日時、場所を現在調整中。詳しくはお問い合わせを。

□今年こそスタディツアーに行こう

前号でも紹介している帰った研修生を訪ねる旅。インドネシアでは、来年度研修生の選考もあります。

第3回 ビルマ

7月21日～29日 8泊9日 23万円

第13回 インドネシア

8月5日～14日 9泊10日 24万円

第5回 スリランカ

8月23日～30日 7泊8日 26万円

*日程は変更しています。

ビルマは至急お問い合わせを。

□第9期林業体験合宿「枝打」

夏の林業作業「下草刈り」の体験や森林観察、森林・林業に関する学習会を行います。

日時：7月3日(土)～4日(日)

場所：兵庫県篠山市大山大乗寺

費用：6,000円(1泊2日)

早急にお問い合わせください。

職員 伊藤 日頃の運動不足解消にと思いたったか、久々にバスケットボールにトライ。案の定カラダがついていかず肉離れ、しばらく足をひきずる。もう若くない。

職員 山西 事務所ボランティアの宝庫(!?)のひとつ神戸市シルバーカレッジの行事に参加。高校時代の旧友にバッタリ。早速事務所にお誘い。こうしてまた一人。

□第14回草の根生活塾

200年前に建ったかやぶきの家で簡素な生活を、農業体験、草木染めの体験等を行います。PHDの研修生と寝食を共にする中から、私たちの生活を見直してみませんか？

日時：7月29日(木)～8月1日(日)

場所：たんば農文塾(兵庫県篠山市)

費用：20,000円

□99年度国内研修生募集

海外の人材のみならず国内にも平和と健康を担う人を育成しようと95年から実施している国内研修生。

内容：PHD協会の事業を通じた実地研修

1. 海外研修生の研修業務を軸とする実践

2. 国際理解・開発教育など国内に向けた啓発活動

3. 公益法人における組織運営

対象：日本国内居住者、日本語のやりとりが可能で、将来、教育・福祉・開発協力などの分野で働くことを志す方。

当会事務所に通勤可能な方。

研修日程：週3～5日(10月から6ヵ月間)

時間：午前9時～午後6時を原則

支給経費：研修手当および交通費

選考：書類審査後、筆記、面接を行います。

締切り：9月5日

詳しい案内をお送りします。お問い合わせください。

職員 藤野 折角インドまで出かけたのに、カルカッタ2泊、ムンバイ2泊、機中2泊の駆け足出張。カレー食べ足りず今日のお昼は近くのカレー屋で大盛り。

職員 小松 春のワークショップがスタート。人前でしゃべる時は準備が入念すぎて多弁になりがちが、今回は短く、新鮮。簡潔小松節も、レポートリーに。

(おおざっぱな順)

「頑張ってるね」いう言葉を掛けることはよくあります。では、研修生から私達へのこの言葉に込められた意味は何だろう、と考えてみました。それは『友情』?『期待』?『希望』?「頑張ってるね」という言葉は日本にいる私達ができることにも返ってくる言葉だと思えます。

6月、もう1人研修生が来日します。今、どんな事を思いながら準備してるんでしょうね?

T. N

編集メンバー：岩切幸子、野添智子、古本妃留美、米本早予子

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載していません。